

やねの上のカールソン



リンドグリーン作
大塚勇三訳

アストリッド・リンドグレン

949 リンドグレン作品集 7

岩波書店 1965

262p 23cm 小学3・4年以上

内容：やねの上のカールソン

(参考) Lindgren, Astrid : Lillebror och Karlsson på
Taket, 1955.

やねの上のカールソン

リンドグレン作品集 7

定価五〇〇円

一九六五年十月十六日 第一刷発行 ©

一九六九年十月十日 第四刷発行

訳者 大塚勇三

発行者 東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三

岩波雄二郎

印刷者 長野市中御所二ノ三〇 田中忠

発行所 東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三

株式会社岩波書店

本文印刷 大日本法令印刷株式会社

製本 株式会社三水舎

表紙・箱印刷 錦印刷株式会社

やねの上のカールソン

リンドグリーン作品集7

大塚 勇 三 訳

岩 波 書 店



日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

LILLEBROR OCH KARLSSON PÅ TAKET

by

Astrid Lindgren

Illustrated by Ilon Wikland

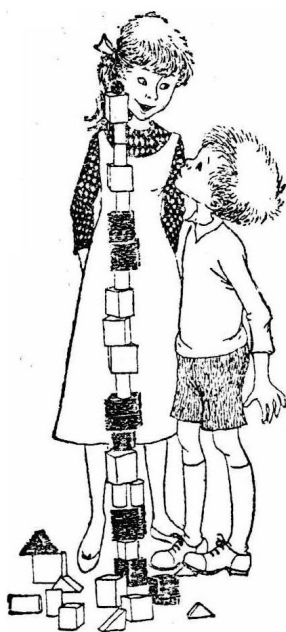
1955

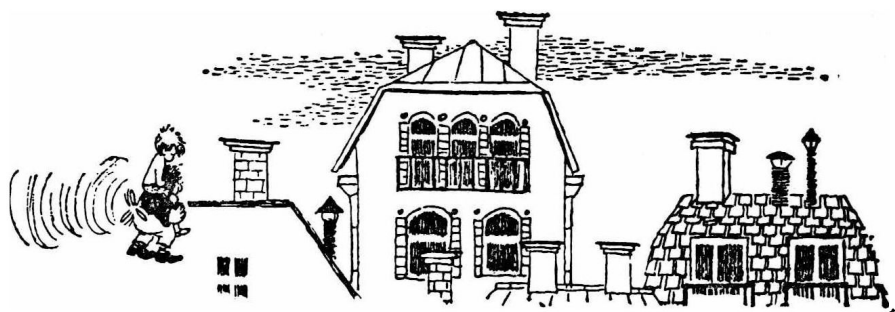
Original Swedish edition published by

Rabén & Sjögren, Stockholm.

This book is published in Japan by
arrangement with the author.

もくじ





5	4	3	2	1
カールソン、	カールソン、	カールソン、	カールソン、	やねの上の
いたずらする	かけをする	テントあそびをする	塔 ^と をたてる	カールソン
.....				
119	80	51	29	9

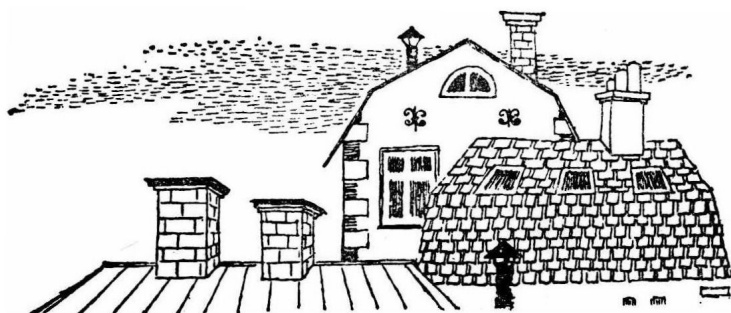
6 カールソン、おばけごっこをする……………155

7 カールソン、魔術^{まじゅつ}をつかう……………190

8 カールソン、誕生日^{たんじょうび}パーティーにでる……………223

訳者^{やくしや}のことば……………259

さし絵^{さしえ}
イロン・ヴィークランド



やねの上のカールソン

大塚勇三
リンドグレン
訳作

やねの上のカールソン



ストックホルムの、まったくあたりまえの町^{まち}の、まったくあたりまえの^{うち}家に、スヴァンテソンという、まったくあたりまえの^{いっか}一家がすんでいます。この^{いっか}一家には、まったくあたりまえのおとうさんと、まったくあたりまえのおかあさん、それに、ボッセ、ベッタン、リッレブルール(ちびくん)という、まったくあたりまえの子ども三人がいます。

「ぼくは、あたりまえのリッレブルールじゃないよ。」

リッレブルールは、そういいますが、それはちがいます。たしかに、あたりまえなんです。年^{とし}は七^{なな}つで、目が青く、だんご鼻^{はな}で、耳

は洗^{あら}ってなく、いつもひぎのすりきれたズボンをはいてる男^{おとこ}の子といたら、さらにいます。ですから、リッレブルールは、まったくあたりまえの子なんです。まちがいありません。

ボッセは十五^{おとこ}の男の子で、フットボールがすきですし、勉強^{べんきょう}はよくできませんから、これもまったくあたりまえ。ベッタンは十四で、まったくあたりまえの女の子らしく、髪^{かみ}の毛^けをポニー・テールにしています。

この家のなかに、たったひとり、あたりまえでないものがありますが、それがやねの上のカールソンです。カールソンは、やねの上にすんでいます。これだけでももう、



ぜんぜんあたりまえじゃありません。ほかの国^{くに}ならちがうかもしれませんが、このストックホルムでは、やねの上の、とても小さな家にすnderものは、まずぜったい

にありません。ところが、カールソンは、そうなんです。カールソンは、とても小さく、まるまるふとつて、自信家の男の人で、しかも、空をとべます。それは、どんな人だって飛行機やヘリコプターにのればとべますが、じぶんの力だけでとべるのはカールソンしかありません。カールソンが、おへそのまんまあたりにあるつまみを、ちよいとひねりさえすれば、せなかにしよつてる、小さな、ぐあいいいモーターが、ブーンとうごぎだすのです。モーターの調子がでるまで、カールソンは、しばらくじつとしています。それから、……モーターが全速力でうごぎだすと、……カールソンは、ふわりとうきあがり、局長さんみたいに堂々と、ゆつたりととんでいくのです。局長さんがせなかにモーターをしよつたらどうなるか、けんとうがつかますか？

カールソンは、やねの上の小さな家で、じつにぐあいいくくらししています。夜には、家のまへの階段にこしをおろし、パイプをふかしながら、星をながめます。もちろん、やねの上ならば、家じゅうのどこよりも、星がよく見られますし、ですから、みんながやねの上にすまないのはおかしいんです。でも、この家に間借りをしている人たち



は、やねの上にすめるなんてことを知りませんし、そこにカールソンの家があることも、まるでござんじありません。なぜって、その家は、じつにうまく、大きい煙突のかげにかくれているのです。それに、たいていの人は、もしカールソンの家につまずいたって、そんな小さい家に気がつきはしません。

あるとき、ひとりの煙突掃除人が、煙突を掃除しようとしたとたん、カールソンの家が目に

はいりました。この人は、じつさいたまげましたね。

「いや、きみようだな！」と、その人は、ひとりごとをいいました。「ここに家があるぞ。まったく信じられないことだが、たしかに、やねの上に家があるんだ。どうして、こんなとこにたつてるのかいな？」

でも、それから、この人は煙突掃除にかかって、その家のことなんかきれいにわすれ、二度とおもいだしませんでした。

カールソンとしりあいになったのは、リッレブルルにはたのしいことでした。なぜって、カールソンがとんでいくところ、なんでもかでも冒険みたいで、わくわくするものになるからです。それにカールソンのほうだって、リッレブルルとしりあいになって、たのしいとおもったことでしょう。なぜって、だれもしらないような家に、たったひとりすnderのは、なんといいっても、そうゆかいじゃないでしょう。それに、じぶんがとんでいったとき、「ヤッホー、カールソン！」と、だれかがどなってくれば、たのしいにきまっています。

さて、カールソンとリッレブルールがはじめて顔をあわせたのは、こんなぐあいでした。……

その日は、リッレブルールにはちっともたのしくない、「調子のわるい」日でした。ふつうなら、リッレブルールにはまったくゆかいなことばかりなんです。なぜって、この子は家じゅうのかわいがられっ子で、いくらでも甘やかされていたからです。でも、ときどきは、調子のわるい日がきます。こういうときには、ズボンにまたあなをあけたといっておかあさんはしかるし、ベッタンは「はなをかみなさいよ!」というし、おとうさんは、学校からはやくかえらないといつて文句をいうのです。

「なんで、町をぶらついてたんだい?」と、おとうさんはいいました。

町をぶらついてたって?……おとうさんは、リッレブルールが一ぴきの犬にあっての知らなかったんです。それは、感じのいい、きれいな犬で、リッレブルールにクンクンと鼻をこすりつけ、しっぽをふって、さもリッレブルールの犬になりたそうなようすをしたんです。

リッレブルールのおもいどおりになるものなら、その犬いぬをすぐにじぶんの犬いぬにできたでしょうに。でも、まずいことに、おとうさんとおかあさんは、犬いぬをぜったいに家いえにおきたがらないのです。それに、そのときとつぜん、ひとりのおばさんがあらわれて、「おいで、リッキー！」とよびました。ですから、リッレブルールは、この犬いぬはじぶんの犬いぬになりっこない、とわかったのです。

「ぼくなんて、一生いっしょうが、い、じぶんの犬いぬがもてないみたいだ。」

なにからなにまで調子ちょうしのわるいその日、リッレブルールは、かなしげにいました。「ね、おかあさん、おかあさんにはおとうさんがいる。ボッセとベッタンは、いつだっていっしょにいる。ところが、ぼくときたら、だれもいないんだ。」

「どうして、リッレブルールちゃん？ わたしたちみんながいるじゃないの。」おかあさんはいいました。

「そんなことないよ。」

リッレブルールは、なおさらかなしげにいました。というのも、ふいに、「この世よ